

# 日本簿記学会ニュース

No. 53:7 / 2012

## 《部会の経過報告》

第28回関西部会は、平成24年5月26日(土)に名城大学(準備委員長:田代樹彦氏)にて開催されました。詳しい内容は本紙部会記をご覧ください。第28回関東部会は、平成24年6月30日(土)に岩手県立大学(準備委員長:金子友裕氏)にて開催されました。詳細は、次号にてお知らせする予定です。

## 《大会のご案内》

第28回全国大会を下記の予定で開催いたしますので、お知らせします。

9月8日(土)

学会賞審査委員会 13:00-15:00

理事会 15:30-17:30

9月9日(日)

高校簿記教育懇談会 10:00-12:00

参加者受付 12:00-18:00

会員総会 13:00-14:00

研究部会報告 14:20-15:30

統一論題報告 16:00-18:00

「簿記離れと簿記の可能性」

座長 佐々木隆志氏(一橋大学)

報告者 島本 克彦氏(関西学院大学)

吉田 智也氏(福島大学)

加瀬きよ子氏

(東京都立荒川商業高等学校)

角ヶ谷典幸氏(九州大学)

懇親会 19:00-21:00

熊本ホテルキャッスル

9月10日(月)

参加者受付 9:30-

自由論題報告 10:00-12:30

第1報告 10:00-10:35

第2報告 10:35-11:10

Tea & Coffee 11:10-11:20

第3報告 11:20-11:55

第4報告 11:55-12:30

昼食 12:30-13:30

統一論題討論 13:30-15:30

## 《お詫びと訂正》

前号(No.52:12)2頁の平成24・25年度研究部会の募集のなかで、「(2)研究成果の報告は、1年経過後の第29回全国大会(平成24年)における中間報告および第30回全国大会(平成25年)における最終報告の2回となります。」とありますが、正しくは、

第29回全国大会 誤(平成24年)→正(平成25年)

第30回全国大会 誤(平成25年)→正(平成26年)です。お詫びして訂正致します。

## 日本簿記学会第28回関西部会記

準備委員長 田代樹彦  
名城大学

日本簿記学会第28回関西部会は、平成24年5月26日（土）に名城大学天白キャンパスで開催された。参加者は67名であった。

今回の関西部会における統一論題は「簿記研究の拡張可能性」であり、向伊知郎氏（愛知学院大学）の司会のもと、次の3氏による報告と、それに引き続く討論が行われた。

第1報告は、西舘司氏（愛知学院大学）による「スガंचीニ勘定理論の実践—初級簿記教育への応用—」である。同氏は、スガंचीニの勘定理論を用いて、初級レベルの簿記（仕訳）を体系的に説明し、その観点から初級簿記教育の導入を行うことを試みている。その利点として、(1) 経験的概念から出発する方が簿記会計に固有の抽象的概念の説明から入るより分かりやすいこと、(2) G勘定（現金勘定）とW勘定（商品勘定+資本勘定）だけで基本的な流れを説明できるという単純化が図れること、(3) その結果導出される貸借対照表は今日的な貸借対照表観と親和性があること、(4) 「生産活動完遂の仮想」によって決算を説明することから、決算を「取引」として説明できるため、期中から一貫した説明が可能となること、といった点を主張された。

第2報告は、沖野光二氏（兵庫大学）による「電子化時代における簿記研究の拡張可能性」である。同氏は、簿記研究における環境素材としてこれまで重視されてこなかった情報通信技術の影響から簿記研究の拡張可能性について検討された。そして、(1) ファイナンス型経済基盤やナレッジ型経済基盤といった新たな社会的経済基盤の認識の下に、それに対応する簿記システムのあり方、(2) 従来の実物財で適用した会計処理方法とは異なる電子商取引に関連する新たな無形のデジタル財に対するストックとフローの管理方法と価値評価、(3) 公表財務諸表作成時における開示情報の拡張性の理論的問題とは別に、情報通信技術の発展により電子帳簿に低コストでアクセスすることが技術的にも可能となったことから、帳簿閲覧のレベルで開示することを前提とし

た記帳のあり方といった点について拡張可能性ないし検討の余地があること、XBRLについては、その仕様やタクソノミの開発が安定した方向性を示していないので厳密な結論的定義は見出せない、と主張された。

第3報告は、望月恒男氏（愛知大学）による「近年の管理会計の動向と簿記研究」である。同氏は、外部環境の変化と内部環境の変化という視点から簿記研究の拡張可能性を検討された。外部環境の変化として、(1) IFRSの導入による資産負債アプローチによれば原価計算が利益計算上の制約を受けなくなるため、たとえば、スナップショット・コストニングのようなより経営者のニーズにあった原価計算の研究、(2) 工業簿記が原価計算との有機的結合から分離されるために工場で発生する費用の新たな分類方法に関する研究を、内部環境の変化として、(3) BSCや知的資産報告書との関係から、簿記が非財務情報の記録・測定にどのように対応しないし貢献していくのかについての研究、という方向性を主張された。

統一論題討論では、3氏の報告に対し、柴健次氏（関西大学）、松下真也氏（松山大学）、河崎照行氏（甲南大学）、村橋剛史氏（朝日大学）、飯島康道氏（愛知学院大学）から質問が寄せられた、活発な議論が繰り広げられた。さらには、司会の向氏より、フロアの方々へも質問が投げかけられ、それに応じる形での議論も展開され、本部会は盛会のうちに終了した。

最後に、ご参加いただいた会員の方々および簿記学会役員の皆様に厚く御礼申し上げます。



## 私の人生と簿記

日本簿記学会前会長代行  
東京理科大学 横山和夫

私と簿記との出会いは1951年、中学3年の時である。当初の成績がそれなりのものであったことで、簿記に興味を持った。その後、働きながら学校に通う生活の中、全商2級、1級、日商初級（現3級）、中級（現2級）を高校在学中に、それぞれ1回の受験で合格した。このことが、私の進路を確かにしたようである。その後、独学で挑戦した日商上級（現1級）では、三度の足踏みをした後、合格したが、勉強の幅の広さと深さを知り、次のステップである国家試験に学習目的を絞った。税理士試験には1959年、公認会計士試験第二次試験には1960年、3年間のインターンの後、第三次試験には1963年に合格することができた。

18歳の時、当時の私の生活状態では無謀ともいえる「教師になりたい」という夢を友人に語り失笑されたが、後にこれが現実のものとなった。公認会計士試験第二次試験に合格後、「税経セミナー」1961年（2月号）の誌上に、一緒に合格した4人の友人との座談会「グループ研究の成果をめぐって」が掲載され、これを機に1987年まで25年間受験指導に携わることとなった。この間、恩師である園田平三郎先生からの紹介で1968年から1987年まで20年間、日本大学商学部非常勤講師（簿記論担当）、1968年からは大藪俊哉先生の紹介で2000年まで計32年間、横浜国立大学経営学部非常勤講師（法規会計担当）を務めさせていただいた。教師への願望はさらに、1985年大山政雄先生の招聘で新設される朝日大学経営学部教授（簿記論、財務諸表論担当）という形でかなえられ、1991年まで6年間奉職した。その後、片岡洋一先生の推挙で東京理科大学工学部（会計学担当）に奉職することとなり、経営学部（簿記論、財務諸表論担当）へ配置替え、さらに2002年65歳での定年を経て、嘱託教授として工学部及び専門職大学院（会計学担当）で講義を続け、今年2度目の定年を迎えたが、工学部（会計学、原価計算担当）で非常勤講師として現在も教壇に立っている。

私の夢であった“大学で教壇に立つこと”を可能にくださったのは、前述の各先生方である。特に大藪俊哉先生には40年を超える長きにわたって、親身になって指導賜り、公私にわたり相談にも乗っていただいた。先生なくしては現在の私の存在はなかったと思っている。さらに元会長戸田博之先生、元会長森川八洲男先生、前会長興津裕康先生にも大変お世話になった。去年興津会長が急逝され、副会長である私が、微力ながら会長の任務を引き継ぎ、2011年度の会務を果たさせていただいた。

現会長新田忠誓先生の下で、計らずも当学会顧問に推挙いただき大変光栄に思っている。今後は後進育成のために微力を尽くし、学会の更なる発展のために新田会長と相談しながら私の責めを果たしていきたいと考えている。

本学会におけるグループ研究は、簿記理論、簿記教育、および簿記実務の3分野に分かれて行われている。私は下記の2つの簿記実務研究会に研究部会長として参加した。

「学習簿記とコンピュータ簿記の乖離」（1982・1983年）の研究ではコンピュータ簿記が複式簿記といえるかという問題に取り組んだ。つまり、コンピュータ簿記では、アウトプットは複式簿記の体裁を整えているが、手続きやコンピュータの中での計算は複式簿記の原理によらないで実践されるので、それによって生ずる不都合は今までの複式簿記の研究では説明できないことを明らかにしたつもりである。

「簿記学的観点から見た実務指針などの検討」（2005・2006年）では実務指針などにとりあげられた仕訳などは、外部取引と内部取引を区別しないものや、従来の取引8要素の組合せを超えたものも存在することを指摘することができたと思う。

以上2つの研究を通じて実務上の簿記の問題点を明らかにすることによって、学会のためにいささかなりとも貢献ができたのではないかと自負している。

最後に、長きにわたって簿記に携わることができたことに感謝するとともに、会員各位に心よりお礼申し上げたい。

## 簿記学会で学んだこと

千葉商科大学 千葉啓司

私が、簿記学会をはじめて知ったのは、1985年『企業会計』でその設立総会の案内を見た時でした。当時大学4年生でした。その後たまたま大学院で畠村剛雄先生の指導を受けることができました。博士前期課程の時は、簿記学会に直接関わることはありませんでした。博士後期課程に入ってから、畠村先生より簿記学会に入会し、事務作業の補助をする様指導されました。私と簿記学会の実質的な結びつきはこの時からと言えるでしょう。

当時はパソコンも今程便利ではなく、インターネットもありませんでした。したがって事務作業も人の手がかかることが多く、先輩の先生、院生の方々と何時間も学会の事務作業をしたものでした。今でも楽しい思い出として残っております。

私自身、当時から人とのコミュニケーションがそれほど得意なタイプではありませんでした。そんな性格でしたから、任された仕事は現金出納と帳簿の作成でした。本来内部統制の意味からもこれらの仕事は分担すべきです。しかし、現金出納と帳簿の作成を別の担当者とする、双方の担当者が毎日の様に打ち合わせ、事務作業を行わなければならないようになります。院生で時間が作れるとはいえ、専属の事務員ではありません。そのためやむなく一人で担当することになりました。

しかし、当然好き勝手できるわけではありません。先輩の先生、また、院生の先輩が厳しく目を光らせていました。事務作業の合間あるいはその後の懇親において先生方からいろいろなお教えを得ることができました。私にとってはかけがえのない経験であります。

博士後期課程の3年間、学会の会計に関する補助の仕事をして戴いたわけですが、この間、どういふわけか理事会にも出席しておりました。現在は簿記学会事務も体制が整っており、こんなことはありません。しかし当時は発足後5年経つかどうかといった時期でした。会計処理の仕方も試行錯誤が続いていました。予算設定なども簿記学会だけあって、

根拠となる詳細な計算が必要です。これらの説明を会計担当の理事の先生が行うのですが、このとき、こまかな数値の説明の補佐が私の担当でした。

当時の理事会では、決算書の作成方法、その他学会の運営に関して活発で熱い議論が戦わされてきました。様々な見解が飛び交い、議論が収束しないことも、議論が感情的になってしまうこともありました。しかしながら、簿記学会あるいは簿記学・会計学に対する各先生の真摯な態度は、当時若かった私にもひしひしと感じられました。今ではもうお会いすることのできなくなってしまった先生方もおられますが、尊敬の念を禁じ得ません。

博士後期課程3年の後、1991年北関東の私立大学に職を得ることになりました。ここで一旦簿記学会事務の仕事から退くこととなります。しかしそれから3年後畠村先生が急逝されました。1994年のことです。将来に希望が持てなくなる程の喪失感を感じました。

簿記学会事務に関しては、これまで畠村先生の大学院生が補助することが多かったわけですが、これで事情が変わりました。当時の幹事の先生方に事務作業の負担がかかることとなります。主に会費関係の作業を行っていただいていた白桃書房さんにもそれまで以上に大変ご協力戴いていたものと記憶しています。

こんな中、1996年幹事が全員かわり、かつ増員されました。そしてその中に私も含まれておりました。それから9年間幹事を致しました。

この様に私は、簿記学会において学会事務の仕事に携り、尊敬すべき多くの先生方のご努力を間近に見ることができました。出版社の方々のご尽力も現場で見ることができました。こうした経験すべてが簿記学会から私が学んだものです。現会長の新田忠誓先生のもと、少しでも学会発展のためにお役に立てればと思っております。

発行所  
編集兼  
発行人

日本簿記学会事務局

連絡事務所

〒101-0021 東京都千代田区外神田 5-1-15

株式会社白桃書房

e-mail boki@hakutou.co.jp

URL <http://www.hakutou.co.jp/boki/>